

教育思想の現在

斎藤喜博を超える試み（1）

鳴瀬 彰夫

前回は、斎藤喜博の「鳥小の教育」をとりあげてみた。彼を日本の教師の原像としてとらえたとき、その後の教師たちは、「斎藤喜博に、どのようにみずからの教育実践を対置していったのか」。斎藤喜博を超える試みのひとつとして、ここでは向山洋一をとりあげてみる。

向山の立ち位置というべきものは、彼の初期の著作の題名に出ている。

「斎藤喜博を追って」^(注1)と「跳び箱は誰でも跳ばせられる」^(注2)である。

向山は斎藤喜博を追う。斎藤喜博の授業が「職人 / 芸」という世界を身にまとうのにたいして、向山は「プロ教師 / 技術」を対比する。ひたすら具体的でわかりやすいことを向山は目指している。

「職人 / 芸」と「プロ教師 / 技術」— この相違は、ひとつには授業のもつ「一回性」の捉え方の違いにあるのかもしれない。

その場限りで消えていく授業、授業の一回性について、斎藤は「教育という仕事はそれでよいのだ。そういうはかない仕事の連続が子どもの可能性を引き出し、子どもを豊かにし、子どもを美しく咲かせ、形成していくのだ。」（「今日の教師と授業」）と述べている。ここでは、教育の限界は子どもの可能性へと直接につながられる。だから教育は素晴らしいと、無媒介につながる。

一方、向山にあっては、授業は「教育技術」として取り出されるものである。

向山は、斎藤の授業における「芸」の世界から、「教育技術」を抽出しようとする。そこに、授業の一回性が孕む「はかなさ」を感じとることはできない。

向山洋一は「誰が指導してもできるやり方」をめざして、斎藤喜博を追う。

1984年に、向山は「教育技術法則化運動」を旗揚げした。「跳び箱は誰でも跳ばせられる」のキャッチフレーズに端的に表れているように、だれがやっても効果のあがる方法（教育技術）を発掘すること。それをまねて授業を行い（追試）、検討する。このやり方を広め、教師全体の共同財産としていくことを目的とした運動体の出発であった。

「教育技術法則化運動」は1980年代後半から大きな広がりを見せた。それは、教育の場におけるひとつのマニュアル化と捉えてもよいのかもしれない。

では、授業のマニュアル化が、何を引き起こすのか。

ひとつの詩を中心におこなった向山の授業を見てみたい。

彼の最初の本である「斎藤喜博を追って」に登場する次の詩をめぐる授業である。

『 てふてふが一匹

韃靼海峡を渡って行った 』

このときの様子が学級通信に描かれている。そもそも、その年に卒業した中学一年生が訪ねてきて、「この詩について感想文を書いてくるように宿題が出た」という。そこで卒業生たちと議論をし、彼自身が次の日に、担任の5年生を対象に授業をするとになった。さらに、学級通信を使って、向山は、「この詩を解釈してみませんか」と周囲の人に問題に出す。

学級通信に様々な意見が現れて、それに向山自身が加わっていく様子が興味深い。まず、授業を受けた生徒の感想。

『作者は、このてふてふの勇氣に感動したのだろう。ぜっ対に死ぬとっているてふてふに、飛んでいってくれ」という願いをたくしたのだろう。「てふてふが一匹」いうのは、むれをなさないで、一人ぼっちでわたっていったのだろう。ふつう、一匹で旅をするよりも、むれをなして旅をする方が、生きるかくりつが多いのだ。それなのに、このあらあらしい、まの海峡をわたっていくのだ。その勇氣を作者は書いたのだろう。もしも、わたって行ったという文章を書かなかつたら、てふてふは、と中でもどつて来たかもしれない。作者は視線のとどくところまであきらめないで、見つめたのだろう。

ぼくは、このてふてふの勇氣と作者の願う心に感動した。このてふてふがふつうの陸地をとんでいるのなら、なんとも思わない。しかし、韃靼海峡というハンディをせおつて、とびたつすがたに感動した。』

内容のある授業が展開されたことが、生徒の文章を通してうかがい知ることができる。そして、学級通信での呼びかけは、さらにキャッチボールの輪を広げていく。

息子が持ち帰った詩を、親子三人で話し合ったという投書もあった。

「この蝶は、何の思いもなくとんだに過ぎないが、この詩作者のその時の心境が、これを書

かせたのだ。この蝶は、絶対に生きてはいけない。」という父親。

「何分の一、いや何億分の一でも可能性がある」とひきさがらない息子。

二人を前に、人生の何かを親子で話し合うことを喜んでいる母親の姿。

「<弱気になる自分に負けまいとする自分>があったのだと思う。波の余波でさえ散ってしまいそうなくてふてふ>に、<自分に対する自分>を感じた」と書く、詩を持ち込んだ中学1年生。

作者、安西冬衛の生涯を調べてきた母親もいた。

明治三十一年三月九日奈良生まれ。大連に住み、大正一〇年、関節炎で右足を切断した。昭和四年詩集を出版。その中に「春」と題してこの詩がある。

昭和四〇年、六六歳で死去。

彼女は、自分の感想をこうつけ加えている。『作者はこの蝶に何を見出したのであろうか。調べてみると作者は体が不自由である。そして標題は春である。今までの暗い自分の生活から、ほんの少しの春をそこに見出し、これからの人生の希望をこの蝶に託したのかもしれない。』

ちなみに、「韃靼海峡」は、樺太と日本の間にある間宮海峡を指す。

また、「このような詩（ないしは詩的な文章）を解釈しようとする自体に疑問を感じます」という意見。それに対する向山の反論。

学級通信には、水面に石が投げられ波紋のように広がっていく姿が見られて、おもしろい。

これに対して、「教育技術法則化運動」をへて、10年後に太田区立調布大塚小で小学校3年生に向かって行われた向山の授業記録が残っている。

同じ安西冬衛の詩を教材にしたもので、授業は法則化運動の成果を示すべくビデオにとられた。教師（向山）の動き、子ども一人一人の動きを二台のカメラで録画し、後にビデオテープから起こした授業記録として残っている。

授業は次のように流れていく。

向山が黒板に大きく詩を板書する。

てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った。

そして分析批判の方法によって、発問、指示していく。

「四列、起立」

「前から読んで、読んだらすわりなさい」

.....

「全員、起立」

「五回読んだらすわりなさい。」

.....

「これを読んで、何か考えられることを、その紙に簡条書きに、一、二、三、四と書きなさい。」

.....

「では、自分が思ったこと、考えたことを発表してもらいます。」

.....

「これ（詩）を絵にして、話者を目玉で書きなさい。」

.....

「いろいろな絵があります。一つずつ、ちょっと、発表してもらいます。」

（「教育」1989年2月号）

何人かの生徒の詩の感想に、「蝶々は死んじゃった」のメモがあった。

これに対する向山の対応について、里見実は次のように感想を記している。

『生きものの生死にたいする子どもの感受性は驚くほど繊細で、しばしば胸を衝かれることがあります。そんなかれらがもつ一面の現れでもあるのでしょうか。ぼくは、このかれらの感覚を、文とのかかわりにおいて深め、さらに覆すことが、この「春」の授業の山場に

なるべきであると考えます。

どういうわけか、向山氏はかれらの意見を、まともなかたちではとりあげません。

「死んだなんて、どこにも書いてないよ」

「渡っていった、とあるんだから、死んでない」ほかの子どもたちの反論で、片山君たちの意見はあっさり一蹴されてしまったようでした。

「書いてはないですね。……書いてはなくて、片山君は、死んだと思うわけですね」と教師。

「先生が、さつき、思うことを書きなさいと……」片山君は不満そうです。」

この点だけでなく、授業全体に感じられるのは、教師から生徒への一方的な働きかけである。一つの型にはめようとする意志である。

自由に生徒に発言させているようでいて、授業には初めからルールがひかれており、その枠組みのなかで、進行するように持っていく強引さが見受けられる。

10年前の授業との落差。それはなんであろうか。

新鮮さが削ぎとられてしまっているという思いがしてならない。果肉を食べ終わって残された干からびたリンゴの芯。

この落差は、どこから生じてきたのか。

授業において、生徒の反応が新鮮すぎるとき、授業の進行が脅かされるのではないかと、教師は急いで「教育技術」の中にその新鮮な反応をとりこもうとする。

授業に安定をとりもどそうとする。けれども、既成のやり方（「法則化」）のコースに乗せてしまった途端、それは初めに持っていた新鮮さを失って、ありふれたものになってしまう。授業は、つねに生きた一瞬一瞬の動きとしてある。そして、教師のもくろみの横をすり抜けていく子供たちがいる。

(注1)「斎藤喜博を追って」(1979年, 昌平社出版), その後「教師修行十年」(1986年, 明治図書)に収録される。

(注2)「跳び箱は誰でも跳ばせられる」(1982年, 明治図書)